

## 博報財団 第9回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究概要

氏名(在住国名)	堀内アニック・美都(フランス)
所属	パリ・デイドロ(第七)大学
招聘回(招聘研究期間)	第9回 (2014年9月01日～2015年2月28日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	西洋の世界地理学・歴史学が近世後期日本の政治思想に及ぼした影響
研究目的	18世末・19世紀初頭という時期は日本政治思想史上大きな転換期にあたる。その理由の一つとして、日本を取り巻く環境が変わり、ロシアの接近に応じて、鎖国政策の正当性が問われるようになったことが挙げられる。この新しい政治状況は蘭学というまだ生まれて間もない学問分野を刺激し、もともと医学に関心を持っていた蘭学者を地理学に向かわせる。その結果、地理学書の翻訳が次々と登場する。これら翻訳された地理学書の影響は今まであまり注目を浴びてこなかった。本研究の目的はこの輸入地理書の実態に迫り、18世紀ヨーロッパの地理学や歴史学に含まれる啓蒙思想の様々な側面を指摘し、翻訳を通して日本に伝わった概念・思考様式を分析する。さらには、その翻訳がどのような経路をたどって19世紀日本に流布したかをつかむことを目的とする。

研究概要: 日本で具体的に行った研究として、まず最初に翻訳書の調査及び収集を行なった。

地理学関係の翻訳書を、その原本となる輸入蘭書、翻訳者のプロフィール、翻訳の背景、抄訳の場合、訳された部分などと合わせて表にまとめた。それをもとに、日本において重要な役割を果たした輸入蘭書の性格、18世紀ヨーロッパにおける位置、その思想的系譜について分析した。

今度の調査では、翻訳者のプロフィール、人間関係にも注目した。翻訳者は主に江戸の蘭学者と長崎のオランダ通詞である。この社会層の違いが及ぼす結果、そして江戸と長崎間の情報伝達という課題を取り上げた。翻訳書は大多数写本の形で伝わっているので、どのようにして、どのような環境でこれらの翻訳書が読み継がれたかを考えることも研究のポイントとなった。

本研究の成果として、18世紀末・19世紀初頭の思想上の転換期を理解する上で、世界地理書の翻訳の影響の重要性を確認することができた。翻訳者の地位、交流、思想に焦点をあてると同時に、翻訳作業を通して新しい政治用語や政治概念が登場したことにも注目した。西洋諸国の発見は同時に「日本」という国の独自性を主張する思想を促し、自意識を高める結果となり、蘭学と国学が結びつく可能性がこの時生まれたことも確認された。従来の政治思想史に比べて、その中での蘭学の影響を積極的、かつ具体的に問う道が開かれたといえる。

展望: 本調査は18世紀末・19世紀初頭における蘭学系地理学書の重要性に注目したが、その19世紀を通じての普及と利用はこれからさらに掘り下げるべき研究課題である。それは、明治政府の外交や交易政策の理解にも貢献できるのではないかと。

また、尊皇思想が一部の蘭学者の言説の中にはっきり現れていることも分かった。今後、日本におけるナショナリズムの台頭を考察する際、西洋諸国理解に貢献した地理書は注目すべき資料である。

翻訳書は19世紀に入って増産される。幕府の設立による蕃書調所は名前を改めながらも幕末・明治期を通じて発展を続けるが、そこで行われた地理学の研究は、この度私が調査した蘭学者による翻訳の延長線上にある。日本の近代化の理解に深く関わるだけに、この発展の行方を見届けるのも重要である。